

幻の恋

岡本 悠

ウッドは、寝る前の薬を飲み忘れていた

夢の中に、ひとみ、が出てきた

そのことを、目を覚ました夜中、メモ張に書いた

そして、また眠った

また、ひとみ、の夢を見た

なにかがおかしい

俺は、ひとみ、に、会いに行くしかない

ひとみ、とは、約1年前に、縁が切れていた

まさか、とは、思ったが

ひとみ、のいた、ソープランドをインターネットで探したら

いた

俺は、ガッツポーズした

一方で、

自分には、この恋しかもうないと思い込んでいた

ぬいぐるみ、を、マスクで首吊りにした

俺の運命は首吊り自殺だろうか？

愛という名のもとに、が流れた

ドラマバージョンを見たら、涙が零れた

今日は、土曜日

土・日は、ひとみ、は休みだった

これが、結果的に運がよかった

最初は、一直線だった想いが

だんだん、歪んでいく

俺は、会っていったい、何を話せばいいんだ

そのうち、ここまで積み上げたものを、

崩す必要はないと思った

俺が、愛せる人は、やはり、ひとみ、だけだと思った

ペチャパイも愛せるし

ババアになっても愛せると思った

そういう、感覚すら、だんだん、薄くなってきた

また、恐怖に変わった

何もない、俺が、いったい、何しに行くんだ

オールウェイズ、を聴いた

丘の上の愛、を聴いた

君の名を呼ぶ、を聴いた

POISON、を聴いた

僕なんか、を聴いた

片想い、を聴いた

はつ恋、を聴いた

テレビでは、

新体操

女子ハンマー投げ

音楽番組がやっていた

俺は、トイレに何回も行った

何度、寝ようとしても眠れなかった

身体全体に緊張感や

フワフワしたものがあつた

俺は、神に、俺このまま死ぬんですか？ と聴くと

それでもいいじゃない

と言つた

愛し貫いたんだから、という意味だつた

月曜日に会つたら

自分の身だけ持つて行つて

あとは、ひとみ、に、任せよう

そして、

神に任せようとした

神は、俺をベッドから、誘い出し、意味不明なことを伝えた

その時は、大マジだつた

現実的に、いろいろ考えた

無職で、どこにも所属していない俺が来て

何をしたいのか？

まだ、仮にデイケアにでも所属していたら、少しは状況が違った

だいいち、俺は、もうコミュニケーションが、下手になっていた

こんな姿をさらしたくない

また、電話番号なり、+メッセージ、LINE などが繋がったら

それも、大変ではないか

ひとみ、には、家族がいるんだぞ、

そして、金のかかる女だ

あの美貌、小さい背、明るい性格が、尊かった

破滅的な恋でしかなかった

禁断の愛だった

神から言わせれば

こっちからは、特別でも

向こうからすれば、ただの1人の客でしかなかった

俺は、忘れなきゃいけなかった

新たな人生に、進まなきゃいけなかった

落ちぶれた未来の俺が

また、ひとみ、に、会いたくなってしまうたら...

それは、いけない

ひとみ、に、まで、嫌われたら

死んでしまうかもしれない

死や、苦しみ、悲しみ、嫌われることが、

怖くなかったらよかった

カレンダーには、

ひとみ、の、出勤時などの情報を綴った

愛という名のもとに、よりも

丘の上の愛

ばかりが、なぜか、流れた

もう、俺は人生がわからなくなっていた

愛が買えるなら...

ひとみ、が買えるなら...

会いに行ってはいけないという感情

抑えきれないこの気持ち

神が誘導してくれればいいのに

でも、片一方でズルイ自分が

ひとみ、に、会わなければ、

金に苦勞することはないな

連絡に追われることもないな

ローランドは、寄りを戻したい男というのは、下心

と、云ったが、

そういう、わけでもなかった

一条の光が射し込んだ

今は、会う時期ではないからやめよう

これで、ケリがついた

何の為に、どんな想いで

縁を切ったのか？

ということを考えれば

軽はずみな行動はいけなかった

なんで、今頃、また、ひとみ、が、出てきたのだろう



幾何学だった

俺は、また、新たな方向で、組み立てて生きていけばよかった

そちらのほうに光を感じ

ひとみ、の道には、暗闇と、絶望と、破壊と、壊滅と、滅亡を、感じた

俺は、「ひとみ、には、いつか会える日が来るよね？」

と言うと

神は「会えるとも」

と言った

それまで、我慢していればよかった

我慢というより、ほうっておけばよかった

昨日の晩、

「ウッド？ 好きな子はいるか？」に、

「いない」と言う

「それでいい」

と、会話を、矢先だった

会いたい、会えない、会いたい、会えない...

アントニオ猪木の「行けばわかるさ」は、この場合、違った

どれだけ、ひとみ、を、苦しめたかわからない

のうのと、会いにいくなんて、選択肢はなかった

気づいたら、朝8時半になっていた

朝の薬を飲もうとしたら、

昨日の寝る前の薬を飲んでいなかった

そういうことだったのか！

俺は、昨日の寝る前の薬と、朝の薬を、立て続けに飲むと、

カレンダーに書いた、ひとみ、のスケジュールを、全部黒く塗りつぶした

あんなに、愛した人はいない

もし、僕に、自由に使える無限のお金があったら、ひとみ、に、会いに行くかい？

またしても、幾何学だった

ボロボロになった記憶が、身体の中に充満した

だから、人生は面白い

これから、俺の人生は、どうなっていくのだろう？

ひとみ、とは、天国で絶対また、出会えるから、そう思うしかなかった...

「完」